

追手門学院大学

『英語文化学会論集』第27号 抜刷

2018年3月20日 発行

追手門型英語教育スタンダードの構築を目指して

佐藤 恭子

追手門型英語教育スタンダードの構築を目指して

佐 藤 恭 子

1. はじめに

現在、グローバル人材の育成が大学教育における重要課題の1つであることは周知の事実である。その中でも英語教育の充実、異文化・多文化社会でのコミュニケーション能力の養成は、最も重要な教育的課題といえる。筆者は2013年度から3年間、全学共通の英語教育の在り方を考える「英語教育プロジェクト」のメンバーとして、全学の共通教育としての英語の学習、指導、評価の統一化（追手門スタンダードの構築）を目指し、その検討を行ってきた。そしてそのための具体的目標として以下を挙げた。

- (1) 目的にあった指導方法、授業形態、e-learning導入の可能性の検討
- (2) 学生に対する学習支援体制づくり
- (3) 英語能力の評価指標の検討（CEFR-Jなど）とレベルの設定
- (4) 適切なプレイスメントの実施と、結果に基づいた学生への履修指導

以下2章で(1)と(2)について、3章で英語コミュニケーション学科に関して(3)と(4)について述べる。4章では、今後取り入れたらよいと思われる実践的英語活動の紹介と新しい科目の提案を行う。そして5章で、英語コミュニケーション学科の10年を振り返りたい。

2. 「英語教育プロジェクト」の取り組みと提案

以下(1)で目的にあった指導方法、授業形態、e-learning導入の可能性の検討について、(2)で学習支援について、行ってきた取り組みと提案を挙げる。

- (1) 英語共通科目の見直し
 - ① 「実用英語」（週2回で、同じ学生を2名の教員で担当）を開講した。従来の「英会話」から変更し、現行の「英会話」分のコマ数だけ来年に向けて増設した。この科目は、学生の視点から見て、見守る教員が2名いることが新しいものであった。これにより、学生の学習の進捗度や学習態度の変化をより細かく観察できることになった。
 - ② 教員の学生に対する見守り体制の強化を趣旨とし、「1クラスに教員1名」から「1クラス教員2名」のクラス運営を提案した。40名クラスで実施可能であるし、20名クラスを2つ作るよりも、効率的な指導が可能であると考えた。またそのための教員増加分は、e-learningと

して教室外での学習へ振り替える。この利点としては、対面授業から個別指導への橋渡しの働きが果たせる点がある。そしてその個別指導の内容としては、e-learningにおける教員の介入、多読授業の導入指導等、自律学習へ至るまでの足場がけの働きを教員が果たすことになる。その他、課題等の簡単な個別添削など、授業内で行うと効率の上がる添削とを区別して行うことも可能となる。

- ③ 現行の「英語講読」は「グラマー・リーディング（仮称）」とする。コンセプトは実践的な「話す」、「書く」といった発信力（プロダクティブ）を支える基礎力の養成に重点を置く。学年が進むにつれて文法の重要性に気付く学生も多くなる。そうした学生の要望に答える必要がある。

(2) 学生に対する学習支援体制づくり

授業外での学習指導として以下の3点を提案したい。

① サポートセンター的な組織

授業外での学習促進として、サポートセンター的役割を果たす組織が必要である。例えば、ラーニングセンター、ラーニングコモンズ in English等の名称が考えられる。現在のE-COにない要素を盛り込む。その具体的内容としては、常駐のTAや、特任助教（若手教員、学習アドバイザー、個別学習相談が可能な人材のイメージ）のいるスペースで実施が可能なが考えられる。現在国際教養学科では、こうした趣旨を反映したものとしてAdvising Sessionを昨年から行っている。毎週昼休みに週に1回ないし2回、学科教員が交替で学生の学習相談や補習、授業の復習などを行っている。学生にも浸透しつつあり、また授業との連動性も持たせることが出来るようになった。このような取り組みの結果、学生を見守っているのは、授業の教室内や授業担当教員だけでなく学科全体であることをアピール出来ている。こうした体制を全学的に展開していく必要があると考える。

② 学習習慣の形成へ向けた指導方法

自律的な英語学習者を育成するには、学習習慣の形成が必須であるが、本学学生の様子を見てみると、まだまだその習慣が十分には身につけていないと考えられる。そのための具体的指導例として、学生に毎週学習記録を付けることから始めてみることを提案したい。詳しくは佐藤（2014a）に述べているが、習慣づけには効果的に機能することが分かった。

学生が書いてきた記録を教員がチェックし、それにコメントを加え、励ましながら学習アドバイスを行う。現在E-COでも英語によるワークショップがあるが、もう少し気軽なもの、何かのついでにふらっと寄れる感じのものが想定される。そして、英語が苦手な学生に対して少しでもやる気を起こさせるような雰囲気作りを行う。「苦手だが、勉強したい。でも何を、どうやったらいいのかわからない」という声は意外に多い。こうした声に応える仕組みが必要である。

③ 英語学習の見える化：オープンスペースの英語学習の環境設定

オープンスペースを用いることによって、学生同士が他の学生の学習している様子を見ることにより、刺激を得られるような仕掛けを考える。どのように学習しているかが、分かりやすい環境づくりと言える。さらに学生による自主学習の促進へとつながる効果も期待もできる（例：5号館地下入り口）。また現在使われているBBCの24時間放送も流しておける場となる。学外の人にもアピールしやすい場所が適切である。その他、e-learningや個別レベルに合わせた多読スペースとしての機能を果たす場所としても考えられる。プレゼンテーションなど人が集まる場所という利点を生かした発表の場（英語でビブリオバトル）など英語の力を試す環境づくりと言えよう。

3. 英語能力の評価指標の検討（CEFR-Jなど）とレベルの設定

本章では、英語能力の評価指標について考えてみたい。これを考える際に、CEFRに触れておきたい。CEFRとは、「ヨーロッパ言語共通参照枠（Common European Framework of Reference for Languages：learning, teaching, assessment：CEFR）」のことで、「外国語教育の学習、教授、評価に関する参照枠組み」と言える。その目的はヨーロッパという異なる言語や文化の中、外国語に対して共通の枠組みを設定することで効果的な外国語学習を目指している。この枠組みの中で、評価に用いるツールが、「～ができる（can do）」という表現を用いたCan-do-Statements（能力記述文）である。これは外国語を用いて何ができるのかを具体的に示したもので、自分の英語力を知ることにより、到達すべき学習目標を設定し、その成果を評価する指標となりうる。また言語知識でなく、言語運用能力を重視している点も特徴的である。

以下3.1では、これを用いた英語文法能力の調査結果を、3.2と3.3では、学科の取り組みとして習熟度別クラス編成と統一テキストを用いたクラス運営について述べる。

3. 1 学生の英文法習得調査：佐藤（2016a）

調査を行った佐藤（2016a）では、対象は英語コミュニケーション学科の学生99名であった。結果から見えてきたことは、基礎的事項については習得していると言えるが、同じような文法項目であっても、段階的な指導が必要なものが多くあることが分かった。そして、その段階をcan-do statements（能力記述文）で示した。ここでは、5つの項目について、その習得の難しさをレベル分けした記述文を挙げる。

1 否定文、疑問文、否定疑問文

レベル1	一般動詞の否定文やyes / no疑問文を用いることができる。
レベル2	現在進行形のwh疑問文を用いることができる。
レベル3	一般動詞の現在形のwh疑問文を用いることができる。
レベル4	現在進行形のwh疑問文を否定文で用いることができる。

2 原級、比較級、最上級

レベル 1	the most + 形容詞を用いて程度が最も高い状態を表現できる。
レベル 2	程度の違いを表すのにnot as…asを用いて表現できる。
レベル 3	数を表す言葉と一緒に比較級を用いることが出来る。
レベル 4	比較級の程度を強調する表現をmuchを用いて表現できる。

3 過去形と現在完了形

レベル 1	agoを用いて過去を表す出来事を伝えることができる
レベル 2	現在完了と共起する表現（e.g. since）を正しく使うことができる
レベル 3	現在完了の否定形をyetを用いて表すことができる
レベル 4	過去形、現在完了と共起する時間表現を使い分けることができる。

4 wouldを用いた願望表現

レベル 1	would likeを不定詞と共に使い、自分の願望を表すことができる
レベル 2	would you likeを用いて、相手に対して、誘いの気持ちを表すことができる
レベル 3	Wh疑問文でwould you likeを用いて、相手に対して誘いの気持ちを表すことができる
レベル 4	would rather (not) を用いて自分の願望を表すことができる

5 代名詞

レベル 1	neitherを用いて否定表現が表せる。
レベル 2	each otherを再帰代名詞や代名詞と区別して用いることができる。
レベル 3	anythingを単数扱いとして用いることができる。
レベル 4	themをitやtheyと区別して用いることができる。
レベル 5	不定代名詞oneを先行する名詞の数と一致させることができる。

調査では、比較級の程度を強調するmuchの使い方、否定疑問文、現在完了、願望を表すwould like toのフレーズとしての定着度、助動詞might、have to、不可算名詞、限定詞、現在完了と過去の区別、代名詞等が十分に習得されていないことが分かった。これらの項目はCEFRで照らし合わせると、そのレベルが一番下に位置するA1とA2のレベルに当てはまることが分かった。今後さらに検証を進めて行きたい。

3. 2. 英語コミュニケーション学科における習熟度別クラス編成

2007年に「英語コミュニケーション学科」が誕生して以降、カリキュラムとして、学科科目を効率良く配置し、基礎的なレベルから実践的なレベルに至るまでの英語力養成を目的に教育を行ってきた。そして、学科内での見直しを毎年行いながら改善への試みを行ってきた。その中で学科教育の特徴の一つとして掲げてきたことは、習熟度別クラス編成であった。2007年度の新カリキュラム1期生については、学科独自のブレイスメントテストを作成したが、その後はG-TELP（レベル4：300点満点）を用いて、1年次入学時、1年次終了時、2年次終了時の3回に分けて、その学力の推移の検証を行ってきた。表1から表3において、それぞれ08、09、10及び11生のG-TELPの平均点を挙げる。

表1 08生のG-TELP平均点

学 年	08生入学時	08生1年次終了時	08生2年次終了時
人 数	145	149	149
平 均	164.4	166.4	177.6
標準偏差	35.9	39.6	38.7

表2 09生のG-TELP平均点

学 年	09生入学時	09生1年次終了時	09年2年次終了は TOEIC
人 数	157	148	—
平 均	162.0	159.7	—
標準偏差	40.6	42.0	—

表3 10生、11生のG-TELP平均点

学 年	10生入学時	10生1年次終了時	10年2年次終了は TOEIC	11生入学時
人 数	167	141	—	159
平 均	161.6	165.6	—	164.9
標準偏差	36.7	32.6	—	41.2

表2から分かるように、09生の2年次終了時期に初めて学科予算としてTOEIC受験料が認められた。この成績を基に3年次の「資格英語」に代表される「実践科目群」のクラス分けを実施することが可能となった。翌年度はさらに3年次終了時点においても実施が可能となり、実践科目の指導の検証ができるようになった。さらに13年度生からは1年次終了時点においても、TOEICの実施によって2年次のクラス分けが可能となった。以下09生から16生までのTOEICの平均点を表4に示す。

表4 09生から16生までのTOEIC平均点

学 年	1年次終了時	2年次終了時	3年次終了時
09 生	—	332	—
10 生	—	306	595
11 生	—	318	345
12 生	—	312	343
13 生	301	312	389
14 生	313	331	409
15 生	298	332	415
16 生	284	326	来年度実施予定

TOEICにおける受験指導については、その効果がまだ十分には上がっていないが、以下でも触れるように、その指導に特化した実践も行いながら現在に至っている。また高得点を取った学生については奨励金の支給や、1、2年生対象の英語授業にゲストスピーカーとして招いて、そ

の実践的な勉強法を話してもらい、機会も作り、学生への動機付けに役立っている。今後も継続して行いたい。

3. 3. 学科共通教材の導入

学科の英語指導の特徴として、学科設立の2017年度より、「英語リーディング」の科目に英文法の共通教材を指定し、これまで5年間続けてきた。この学習成果の検証は、学科教員による努力で、紙ベースの試験問題作成が行われ、半期に5回のペースで試験を実施した。さらには、これを学内コンピュータによる小テスト実施へと展開していった。さらに期末試験にはペーパーテストで評価を行った。これらの指導において、時には授業外の学習として、自習型の小テストも追加していった。こうした実践の結果、基礎的な学力不足はあるものの、自主学習への習慣づけが少しずつ身についていったと思われる。

さらに先に見たようにTOEICを用いた英語力の測定を行える環境が整い始めた時期に、1年生にはTOEIC単語集を共通教材として選定し、その学習評価をwebclassを用いて行った。これらの準備には学科教員の協力によるものが大きかった。さらには2年生には、TOEIC問題集を共通テキストとして用い、その評価の統一化を図った。こうした取り組みが、すぐに高得点には結びつくわけではないが、学生のTOEICに対する意識付けや動機付けは高まったと考えられた。

3. 4. 問題点と課題

上で見てきたような現状において、次に問題としてあがってくるのは、多様な学力を有した学生をどのように一斉授業の中で扱うかということである。授業時間だけで出来ることは限られており、どのようにすればより効率的に指導できるかを検証すべき時期に来ている。たとえば、同じクラスで、どのレベルの学生に焦点を合わせるか、AからEの習熟度別クラス分けを実践しているが、各レベル間での教材の難易度や授業の進め方やスタイルはどうか、レベルにあった適正なものになっているのか、1, 2年次の必修科目の科目間連携はどうか等を早急に議論すべきであろう。学科では、授業以外で、学生の英語への興味、関心を保てるように、海外研修、英語スピーチ、英語落語、留学生との交流などを学生に提供してきた。既に終了してしまったものもあるが、今後はより多彩な催しを多く取り入れていきたい。

こうした問題点や課題へ向けて今後できるだろう現実的な案として、英語を本当に学びたい高い動機付けを持っている学生から構成されるトップ集団を作ろうという案が2012年から2013年にかけて学科内でまとまった。それは、最終的には学科全体の引き上げを念頭に置いたものであるが、まずは指導のターゲットを上位の学習者へ向けて、特別指導プログラムを設定し、その波及効果を学科全体に広げる努力を行うという趣旨であった。学生たちの頑張りが、広く学生募集へもつながると期待され、こうしたプログラムやコースが学内だけでなく、学外へも広く知らしめることができるように、学生募集における英語特化型入試や奨学金の設定も議論された。結果的には、この学科提案は現在のE-COや学部横断的なGCC生へと展開したと言えよう。確かにGCC

生の一期生は、意欲も高く選ばれた少数の学生が、世界で英語を用いて戦ったという華々しい歴史を作ったと言えよう。帰国後もゼミでの活躍をみると、自律した自己発信のできるリーダーへと変身しつつある。こうした背景の中、「英語コミュニケーション学科」は2016年より「国際教養学科」へと名称変更し、翌年2017年4月より、文字通り新しいカリキュラムの開始に至った。

しかしながらより大きな視野で改革をとらえれば、やはり学科の枠を超えて学部単位で動かししていく必要がある。英語、中国語の両方を駆使して世界へ羽ばたける人材の養成が国際教養学部設置時の目標の一つであったが、その原点に立ち戻って外国語学習の習得を目標にした具体的な枠組みを設ける必要がある。その際に横並び式のコース制でなく、語学訓練は4年間全体を通して1つの軸としてとらえるイメージが有効であると考えられる。語学中心の実践型学習は専門知識の習得と対極に位置するものではなく、すべての学生に必要なものであるとみなしたい。具体的な語学力は実社会においても評価されやすいものであり、学生の自信にもつながる明確な指標になると期待される。

4. 授業の活性化を目指した提案

これからの新しい英語学習の一例として、最後にいくつか具体的な授業スタイルや英語活動を提案したい。

① Potluck English：ポットラックイングリッシュ

これは教員が学習題材を用意するだけでなく、学生も勉強したいものを持ちこみ積極的なアクティブラーニングを目指す授業の展開を目指すものである。そのねらいは、英語を用いて自己を表現できるプロダクティブな英語力の養成を、特にオーラル面（oral/aural）を重視して行うことにある。具体的には、身の回りのことや日常生活に必要な語彙、表現ができる能力を身につけることを目標とし、出来る限りオーセンティックな教材を使用し、学生の動機付けを高める工夫も同時に行う。授業は、毎回1回で完成する。実際の活動を通して英語を使うことの抵抗感を減らしていくことを目指す。

② ネイティブ講師による英語プレゼンテーションセミナーやライティングセミナー

現在外部講師を招いての授業は「通訳英語」における現役通訳の実践的な指導、学外では「観光ビジネス英語」の現役ガイドによる京都英語観光体験に限られている。ライティングセミナーは現在日本語によるものであるが、英語についても環境整備が必要である。

③ 複数教員による多角的授業

これは1回、一人の教員で担当するのではなく、同じクラスを週2、3回で複数担当者で同じテーマで担当することをねらいとするものである。数回の授業で一つの課題を達成していく

プロセス重視型の授業となるであろう。そして、この成果を発表して最終週に成果発表などの会を作ることも、他の授業への影響も大きいと考えられる。

④ すぐにでもできる教室英語活動

実際にやってみてうまくいった英語活動としては、ペアワークの形態で、英訳、和訳の練習を行うものである。例えば日本の行事など、内容についてよく知っているものをテーマに、それらについて書かれた簡単な英語のパッセージを2人1組の一方に渡し、英文を書かれた紙を持っている人が日本語に言い換え、持っていない人は相手が説明する日本語を基に、英語でそれを表現する。答は既に一方が持っているが、どのような日本語を与えればパートナーが、それを英語にしやすいかを考えながら行うものである。うまく英語になった時はペア同士が達成感を味わえる点、またその成果の様子も、活動中に教員が判断しやすいと言う点からもよい方法であると感じた。

最後に、「英英辞典で英単語あてクイズ」を挙げておきたい。これもペアやグループ、あるいはクラス全体でも使えるもので、英英辞典から抜粋した単語の説明文を読んで、それが何の英単語のことなのかを当てる。分かりやすい説明の辞書を探しながら英文を吟味する作業は、読解へとつながり、また相手に理解されやすい発音に気付かせる点など、幅広く活用できる。これに慣れたら、辞書なしで英文を自ら作り、クイズを作るゲームへと展開も可能である。

今後は、より多くの学生が楽しんで英語を学べるような初歩から楽しく学びたい学生向けへの科目も必要であろう。例えば、英語、ドラマ、音楽を用いた学習や子供を対象にした英語の読み聞かせ、児童文学、マンガの翻訳等も考える価値がある。今後の検討事項である。

5. 終わりに

筆者は、「英語コミュニケーション学科」が設立された2007年に赴任した。そのため当時の学科改組へ向けた先生方のご努力は十分には承知はしていないが、多くのエネルギーと時間を費やされたことと思う。筆者は新しい学科の始まりから新メンバーとして加わったわけで、何もかもが新しいと言えばそうであった。しかし10年を振り返ると、山あり、谷あり、学科内でも学内でも激動の時期であったと言える。学科教員のメンバーもこの間色々と変遷を遂げた。2007年4月に2名、2008、2009年にそれぞれ1名、2013年に1名が新しく着任したが、1名を除いてすべて学科を離れた。全体としては定年退職が2名、他教育機関への異動が3名、退職4名となった。2007年度途中には学科の中心的存在として支えて下さった樋口教授が、ご病気のため御逝去され、ほとんどご一緒に仕事が出来なかったのは本当に残念であった。現在当時の学科を知るメンバーは5名となり、そのうちの1名がこの度退職される新谷教授となり本当にさびしい限りである。しかしながら、来年度、そしてその翌年と「英語コミュニケーション学科」の学生を2年間、無事に送り出すという責務がまだ残っている。少しでも英語の力を高め、自律した社会人と成長してもらうために、これ

まで以上の努力を積み重ね、歴史を刻む学科の責任を教員一丸となって果たしていきたい。英語を身につけるのに秘訣はない。そしてその成果を科学的に測れたとしても、それは目に見えて華々しく現れるものではない。言語の世界も科学ではあるが、期待と現実の間の数字はいつの時代も厳しいものである。目先の英語教育を取り巻く風潮に流されることなく、学科学生一人一人が喜ぶ顔を思い浮かべながら、これからも地道な努力を続けることを忘れずに邁進したい。

参考文献

- 佐藤恭子、権瞳、アラン・ベセツト、有馬淑子. (2013). 「自律学習におけるメタ認知ストラテジーの指導に向けて - 「学習記録」と「授業アンケート」の実践 -」『追手門学院大学教育研究所紀要』, 第31号, pp.40-49.
- 佐藤恭子 (2014a) 『英語学習者はe-learningをどう使っているのか - 自律学習におけるメタ認知ストラテジー能力の養成に向けて』(溪水社) 佐藤恭子編著、権瞳、アラン・ベセツト、有馬淑子
- 佐藤恭子 (2014b) 「学習発達段階を考慮した英語文法事項配列の検討」大学教育研究フォーラム 第20回大会発表論文集 pp.64-65. (京都大学)
- 佐藤恭子 (2016a) 「ニューラルテスト理論を用いた英語文法能力調査」大学教育研究フォーラム 第22回大会発表論文集 pp.146-147. (京都大学)
- 佐藤恭子 (2016b) 「段階的な英語文法指導を目指した習熟実態の検証」追手門学院大学『英語文化学会論集』第25号 pp.15-26.
- 佐藤恭子 (2017) 『Can-Doで示す英語文法指導 - 文法能力の習得実態調査を中心に -』(溪水社)

